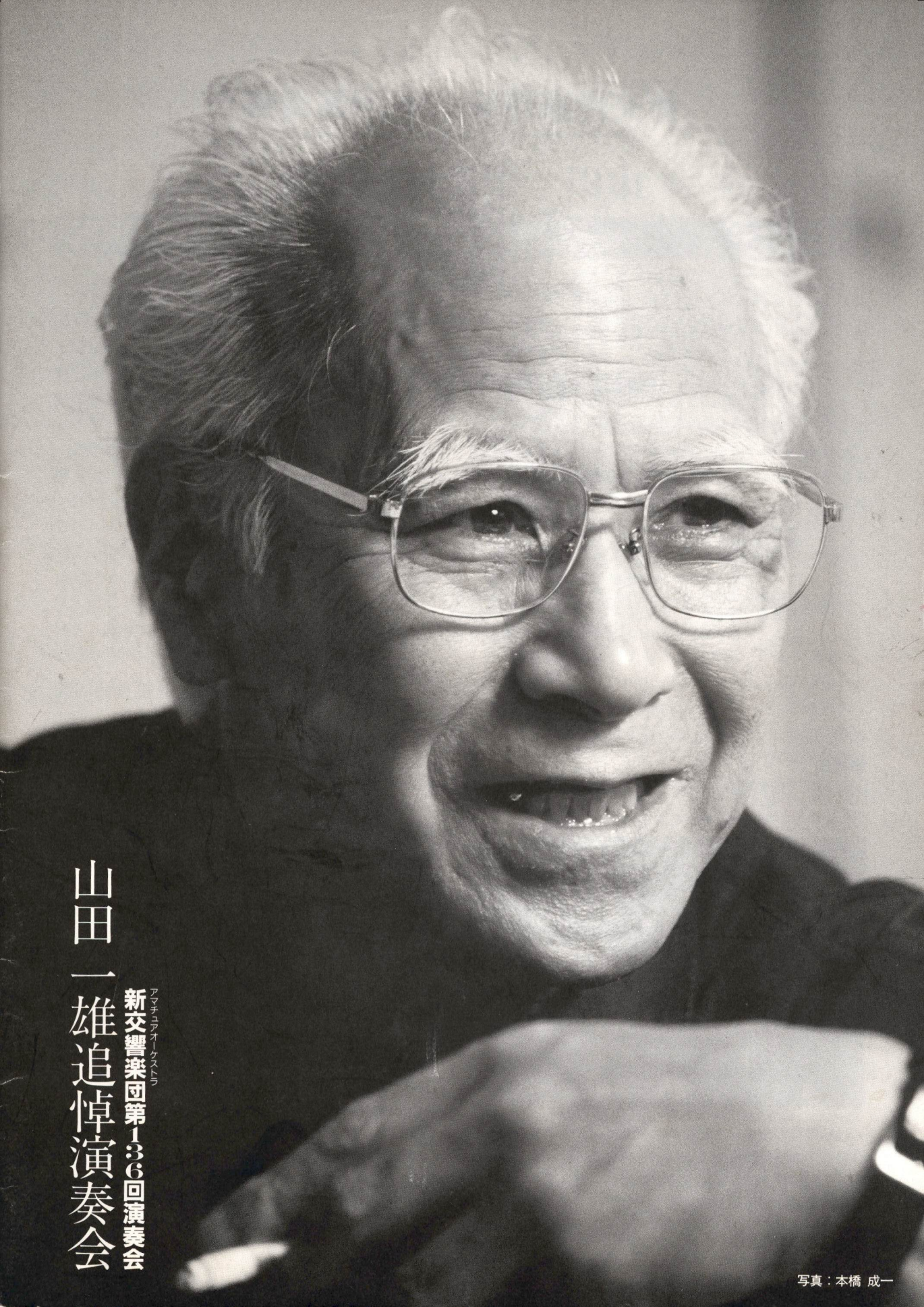


山田一雄追悼演奏会

新交響楽団（アマチュアオーケストラ）第136回演奏会

写真：本橋 成一

アマチュアオーケストラ

新交響楽団第136回演奏会

The New Symphony Orchestra The 136th Concert

山田一雄追悼演奏会

YAMADA Kazuo Memorial Concert

指揮：小泉 和裕

KOIZUMI Kazuhiro, Conductor

山田 和男：交響的「木曾」

YAMADA Kazuo : Symphonic KISO

―― 休 憩 ――

グスタフ・マーラー：交響曲第５番 嬰ハ短調

Gustav MAHLER : Symphony No.5 C#-minor

《第Ⅰ部》第１楽章：Trauermarsch. In gemessenem Schritt. Streng.
Wie ein Kondukt ―― 葬送行進曲。正確な歩みで厳格に、葬列のように。
第２楽章：Stürmisch bewegt. Mit größter Vehemenz ―― 嵐のように、激烈に。
《第Ⅱ部》第３楽章：Scherzo. Kräftig, nicht zu schnell ――スケルツォ。力強く、ただし速すぎず。
《第Ⅲ部》第４楽章：Adagietto. Sehr langsam ―― アダージエット。非常にゆっくりと。
第５楽章：Rondo-Finale . Allegro-Allegro giocoso. Frisch ―― (４楽章から続けて)ロンド。爽やかに。

主催：新交響楽団

1992年7月19日(日) 2:00p.m. サントリーホール

●指揮

小泉 和裕

KOIZUMI Kazuhiro, conductor

写真：木之下晃



1949年京都生まれ。69年東京芸大に入学、山田一雄に師事した。70年民音指揮者コンクールで第１位入賞、日本フィルに指揮研究員として入団。72年には新日本フィル創立に指揮者として参加した。同年10月ベルリン音楽大学に入学、ラーベンシュタイン教授にオペラ指揮法を師事。

73年に第３回カラヤン国際指揮者コンクールに第１位入賞、その後ベルリン・フィルを指揮した。75年、新日本フィルの音楽監督に就任、同年３月にはベルリン・フィルの定期演奏会をはじめ、ウィーン、パリ、イタリア、旧西ドイツの各地でオーケストラを指揮、好評を博した。

その後、海外での活動をより充実させるため、79年に新日本フィルの音楽監督を辞任、ベルリンに居を構えてミュンヘン・フィル、バイエルン放送響、フィルハーモニア・フンガリカ等と共演するなど、ヨーロッパ各地で活躍した。アメリカでも78年にラヴィニア音楽祭でシカゴ響を指揮、また80年には同響の定期演奏会を指揮、注目を集めた。この他にボストン、デトロイト、シンシナティ、モントリオール等にも客演している。

83/84シーズンから88/89シーズンまでカナダ・ウィニペグ響の音楽監督、86～89年に東京都響の指揮者をつとめた。ロンドンのロイヤル・フィルには88年より定期的に招かれ、演奏会およびレコーディングを行っている。

89年から九州交響楽団の首席指揮者に就任、89/90シーズンからは本拠地を日本に移して多くのオーケストラとの共演をはじめ、オペラにも力を注いでいる。92年より大阪センチュリー交響楽団の首席指揮者。新響とは初の共演となる。

国民詩曲と「交響的《木曾》」 Symphonic“KISO”

自筆譜表紙に「大管弦楽の為の交響的《木曾》山田和男、作品十二、東京・11月10日・1939（2599）」と記されたこの曲は、当時の日本放送協会が国民詩曲と題して、日本の民謡を使うことを条件に一連の管弦楽を作曲家たちに委嘱したなかのひとつである。

国民詩曲第３夜の第２曲として、作曲者自身が新響（現N響）を指揮した放送初演は、1940年（つまり皇紀2600年）の１月26日、午後８時より行われた。それから50年余りの歳月を経た1992年5月8日、仙台フィルの定期演奏会で、外山雄三指揮により舞台初演がなされた。新響は惜しいところで初演の栄を逃したことになるが、それにしても、なぜこんなにおもしろい曲がオクラになっていたのか、だれしも疑問を持つところではなかろうか。

埋もれた玉を磨くのは誰？

第一回国民詩曲は1938年、曲名は略すが放送順に、大木正夫、飯田信夫、池内友次郎、平尾貴四男、服部正、江文也、深井史郎、宮原禎次以上８人の作曲家に委嘱、放送された。

第２回は９人の作曲家に委嘱され、1939年12月から1940年の２月にかけて４夜にわたり放送された。

第１、２夜は、菅原明朗「明石海峡」、大中寅二「お茶節による前奏と歌」、須賀田磯太郎「東北と関東」、松平頼則「南部子守歌を主題とするピアノと管弦楽の為の変奏曲」、清瀬保二「日本民謡の主題による幻想曲」、第３夜、杉山長谷夫の「富士、箱根の印象」と山田作品、第４夜、太田忠「狂詩曲第一」、山本直忠「日本幻想曲」であった。

このうち菅原明朗、松平頼則作品は「日本の交響作品展」で新響が、清瀬保二作品は東京交響楽団が復活演奏している。その結果は、作品を今日に生かすかどうかは、いま現在、演奏するものの肩にかかっていることを明らかにした。日々新しいものを生み出そうとする作曲家ほど自作にきびしいものだし、山田一雄の場合もそうだったに過ぎない。ただ、日本の音楽界全体の問題としては、戦争による中断の後遺症がいまだに続いているとしかいいようがない。

作曲家山田一雄像はまだこれから

作曲家山田一雄の全貌が明らかにされるのはまだこれからのことだが、この曲に先立つ管弦楽の数曲、まず「日本の俗謡による前奏曲」（日本放送協会募集で第一位に入選、山田耕筰により1937年初演）、交響詩「若人のうたへる歌」（新響第２回邦人作品コンクールに入選、ローゼンシュトック指揮で1938年初演）とくらべても、「交響的＜木曾＞」が、一段と「迫力に満ちたスケールの大きい曲」をねらってかかれたものであることにはまちがいない。

「庄内おばこ」によるラプソディーから、「木曾節」への心憎い移り変わり、リズム動機に俗謡「農兵（ノーエ）節」もあらわれるほど、明るくバイタリティーに富んだ展開の後半。民謡を素材としながら情緒に溺れる事なく、よくオーケストラの絢爛さを表に出しているのは、作曲者の批評精神がそうさせているのだ。

21世紀に向けて国民詩曲に

早坂文雄は、第２回国民詩曲の放送当時、静と動二つの対照による構成、木曽節を俗から救いダイナミックに進行させた見事さから、この曲を全９曲中最上位にあげている。逆に、当時の演奏で弱点と聞こえた細かすぎるリズムの刻み、時に聞こえる不明瞭な楽想などの問題を克服することこそ、今日の再演者の創造性に期待されるところである。

（小宮多美江・音楽評論家）

楽器編成：ピッコロ１、フルート２（２番はピッコロ持替）、オーボエ２、イングリッシュホルン１、クラリネット２（２番はバスクラリネット持替）、アルトサクソフォーン、ファゴット２、コントラファゴット１、ホルン４、トランペット３、トロンボーン３、バスチューバ１、ティンパニ、シンバル、大太鼓、小太鼓、トライアングル、シロホン、ウッドブロック、タンブリン、チェレスタ、ピアノ、弦楽５部

マーラー：交響曲第５番 嬰ハ短調

世紀末だからか、いわゆるクラシック音楽といわれるものに聴衆が物足りなさを感じるようになった状況を反映してか、一世紀を経た最近になって、マーラー・ブームなるものが巻き起こっている。マーラーに関連する映画も次々と登場している。1973年にケン・ラッセル監督の「マーラー」が封切られたかと思えば、1987年にはレゾフスキー監督による伝記映画も登場した。考えてみると、過去にも作曲家はたくさんいたけれども、映画の主人公になった人はそう多くはない。記憶に新しいところでは、モーツァルトの伝記映画「アマデウス」が一大モーツァルト・ブームの引き金になった例もあるが…。

マーラーと深い親交があり、現在では彼と並び称される作曲家にアントン・ブルックナーがいる。マーラーは1877年に大学で彼の音楽理論の講義を聞いてこれに感激し、以来二人は師弟の関係というよりも親しい友情で結ばれた。マーラーが最初に出版した曲がブルックナーの交響曲第３番のピアノ編曲版であったことが、師への敬意の念を物語っているし、またこの作品は後の交響曲作家としての彼の才能を示している。この交際によって、マーラーは管弦楽法への理解も深めることになった。ブルックナーも最近になって静かなブームになっているようだ。ただし映画の主人公になるにはマーラーに比べるとあまり格好がいいとは言えないが…。

「ベニスに死す」に使われた第４楽章

「マーラーと映画」を考えると、何と言ってもルッキーノ・ヴィスコンティ監督の最高傑作である「ベニスに死す」を忘れることはできない。1971年に封切られたこの映画は、表面的にはマーラーを主人公にしたものではないけれども、マーラーや彼の周辺に展開した出来事と密接に結び付いている。そして最も注目すべきことは、この映画には交響曲第５番の第４楽章〈アダージェット〉の旋律が繰り返し登場することである。

この旋律は、ワーグナーの楽劇におけるライトモティーフと呼んでもいいほどに、この映画の要所では必ず登場し、基調となる雰囲気を作り出すのに重要な役割を果たしている。ある意味では、この旋律が映画の主役であるといえるかもしれない。特にこの旋律の持つ、叙情的で柔らかな、しかしどことなく感傷的な独特の雰囲気は、コレラの蔓延するヴェネチアで、自らの命をかけて美少年の影を追い求めながら死んでいく、主人公の生き方にきわめてよく合っている。これは映画音楽のもっとも成功した例であると言えるのではないだろうか。

弦楽合奏とハープだけによるこの〈アダージェット〉は単独でもよく演奏され、ブームが起こる以前からオーケストラのレパートリーとして定着していたが、「ベニスに死す」に用いられたことによって、クラシック・ファン以外にも知られるようになった。

人生の最も充実した時期に作曲された５番

交響曲第５番は1901年夏に着手され、翌年秋、42歳の時に完成された。この時期は彼の生涯においても多くの出来事で注目される。中でも1901年という年は、彼の生涯の妻となる女性、アルマ・マリア・シントラーに初めて出会った年でもあった。アルマは高名な風景画家エミール・シントラーの20歳になる娘で、彼女の文学と音楽の教養はマーラーに感銘を与え、最初の出会いからわずか数週間後に、二人は早くも結婚に踏み切った。12月29日には婚約通知が出され、1902年３月９日に結婚式が行われた。そして、彼はこの第５番をアルマに献呈した。

「私の愛しいアルムシ、私の勇気ある、そして忠実な伴侶」

マーラーは５つの楽章を、第Ⅰ部（第１・２楽章）、第Ⅱ部（第３楽章）、第Ⅲ部（第４・５楽章）の三つに分けた。第１楽章は激情的で闘争的な激しさを持つ第２楽章への、第４楽章は荘厳で躍動感あふれる第５楽章への長大な序奏部といった性格を持っている。

初演は1904年10月18日、作曲者の指揮によりケルンで行われた。初演後も改訂が重ねられ、この交響曲には少なくとも３つの版がある。本日の演奏は C.F. ペータース版。　　（島丸 睦美・トランペット）

楽器編成：フルート４（３・４番はピッコロ持替）、オーボエ３（３番はイングリッシュホルン持替）、クラリネット３（３番はバス・クラリネット持替）、ファゴット３（３番はコントラファゴット持替）、ホルン６、トランペット４、トロンボーン３、バス・チューバ１、ティンパニ、シンバル、大太鼓、シンバル付き大太鼓（同一奏者によって両方同時に奏する）、小太鼓、トライアングル、グロッケンシュピール、タムタム、ウッドブロック、ハープ、弦楽５部。


ニューヨーク
●Isetan of America Inc.
●Barneys America Inc.
◆Isetan New York Office
ロンドン
●Isetan (UK) Ltd.
★Isetan London
パリ
◆Isetan Paris Office
ミラノ
●Isetan (Italia) S.P.A.
◆Isetan Milan Office
アムステルダム
●Isetan International Finance B.V.
バルセロナ
●Isetan Spain S.A.
★Isetan Barcelona
◆Isetan Barcelona Office
ウィーン
●Isetan GmbH
★Isetan Wien
★Kikkoman Hoshigaoka (Restaurant)
NETWORKING
北京
◆Isetan Beijing Office
香港
●Isetan of Japan Ltd.
★Isetan Hong Kong
●Superio Co., Ltd.
バンコク
●Isetan (Thailand) Co., Ltd.
★Isetan Bangkok
クアラルンプール
●Isetan of Japan Sdn. Bhd.
★Isetan Kuala Lumpur
シンガポール
●Isetan (Singapore) Ltd.
★Isetan Singapore
台北
◆Isetan Taipei Office
高雄
●大立伊勢丹
ジャカルタ
◆Isetan Jakarta Office
★海外店
●海外関連会社
◆海外駐在事務所
東京
★Isetan Company Ltd.
ISETAN
Isetan Department Store, 14-1, Shinjuku 3-Chome, Shinjuku-ku, Tokyo TEL:03-3352-1111

山田一雄主要作品集——小鍛冶 邦隆・編

作品表には作曲家が備忘録へ記載した作品で、自筆楽譜、あるいはスケッチ等が確認できたもので、1931年以後（作曲家の東京音楽学校入学後）の作品を載せた。また編著の判断で一部、重要と思われる作品を追加してある。なお作品の特定できない多数のスケッチ、またかなりの数にのぼる自作以外のオーケストラ編曲と、ラジオ・テレビの放送用音楽、映画音楽、機会音楽、校歌社歌等は割愛した。オーケストラ・パート譜や紛失したと思われるスコアは、今後、作曲家の書庫以外からも発見の可能性がある。

（1992年7月9日現在）

	管弦楽曲	編　成	備　考
1936	日本の俗謡による前奏曲	3管	日本放送協会(JOAK)コンクール第一位入選 山田耕筰により初演 スコア、パートNHKデータ情報部
1937	交響詩「若者のうたへる歌」	3管	新響第2回邦人作品コンクール入選 1938 J. ローゼンシュトックー 新響により初演 スコア、パートあり
1938	バレエ(舞踊曲)「白夜」	2管	スコア、ピアノスコアあり
1939	国民詩曲「交響的〈木曾〉」Op.12	3管	スコアあり、パートはNHKデータ情報部
1940	三幕よりなるバレエ音楽 「呪縛(印度)」Op.13	2管	スコア 組曲「呪縛」のパート譜あり
1940(1939？)	序曲「荘厳なる祭典」	3管？	スコア不明、ピアノ・スケッチ　一部確認
1940	嬉遊曲	室内Orch.(1管)	川奈バレー団のために スコア パートN響
1943	バレー「バリ島の月」	1Fl. 1Cl. Str-qu. 1Per. Pf.	スコア 貝谷八百子舞踊研究所のために
1944	おほむたから（大みたから） Op.20	3管	スコア 朝日新聞委嘱1945山田一日響で初演(第262回定期)
	戦列にOp.22	2管	スコア
	二つの慰安曲	Vl. Orch.(？)	スコア不明、同年6月2日辻久子ヴァイオリン・コンサート山田一日響で初演
1956	シンフォニエッタ 「小交響曲(名人)」	室内Orch.（1管）	スコア
?1962	管弦楽曲「東北民謡」	？	スコア不明、ピアノ・スケッチ断片のみ確認

	器楽曲、室内楽曲	編　成	備　考
1931	短詩	Pf.	両曲とも完全な無調で書かれている
	闘争ー短詩	Pf.	
1934	〈Shizuka〉に捧ぐ	Pf.	1985(？)に作曲者改作あり
	日記ー樹と性慾	Pf.	
	弦楽四重奏曲「三つの古典的な断片」	Str-qu.	第一楽章のみ
1935	ピアノのための「一つの感想」	Pf.	1.亡霊の蠱惑の歌ー狡猾と巧眩の薄笑い 2.いらへなき処女(おとめ)の悒愁ー純潔な焔の儀(すがた) 3.行進曲「陽の光を与へよ」 ー〈自由を我等に(マヌーラリヘルデ)ノ〉ー（未完） 1936に改作（3.は未完）
1935	ピアノのための 〈アンプロヴィザシオン〉	Pf.	
1935	若者のうたえる歌 彼の随想から（海の略図） 「海」、「唄」、「行進曲」	Vc. Pf. Str-qu.	同名管弦楽曲とは別
1936	弦楽四重奏曲第一番(ハ調)	Str-qu.	1937年3月11日現代日本作曲家連盟第2回作品発表会初演パートあり
1937	エレガンス	Fl. Ob. Fag.	管楽研究会刊（パート付き）
	2つのエレガンスより(II)	Fl. Ob. Cl. 2Fag. Triangle, Celesta.	〔II〕のみ上記作の続編か？
1939	無伴奏チェロ・ソナタOp.10	Vc.	1939年7月井上頼豊初演
1938	フルートのための「二つの唄」	Fl. Pf.	II（「其の二」）は1937に書かれた？
?1937	Op.14		
1940	ヴァイオリン・ソナタOp.15	Vl. Pf.	
1943	ソナティネOp.19	Pf.	草間加寿子さんに捧ぐ。日本のソナチネ1(音楽之友社刊)
1945	ノットゥルノOp.23	Fl. Pf.	タイトル・ページに“北爪君”とあり
	麦踏ミ(み)	Cl.	
1947	ノットゥルノ　リリ子のためにOp.23-2	Fl. Pf.	
	ノットゥルノOp.23-3 「intermede」		No.3(intermede)林リリ子に捧ぐ、曲頭にPierrotのタイトルあり

	声楽曲	編成・歌詩	備　考
1932	「くちづけ」	独唱、Pf. 薄田　泣菫	
	「幽思」	〃　石川　啄木	
	「白壁」	〃　島崎　藤村	
1934	「春の朝(あした)」	独唱、Pf. (ピアノ・スコア) P. ブラウニング (上田敏訳)	小Orch.版あり？
	「樺太の越年」	独唱、Pf. 村尾　獲郎	
1935	歌曲集「コクトオ三題」	独唱、Pf.	
	1. 5月の朝	J. コクトー	
	2. 少年水夫	(堀口大学訳)	
	3. 踊り子		
	「朝」	無伴奏女声四部合唱 白椿	
	「猫」	バリトン、Pf. 堀口　大学	伊藤武雄氏に捧ぐ 1985に作曲者一部改訂
1936	カンタータ「辮髪時代から」 (寓話)	ソプラノ独唱、女声合唱 Orch.(一管) H. ハイネ (生田春月訳)	スコア ピアノ・スコアあり
	「春宵語(Shun Sho Go)」	朗読、Orch.(一管) 城　左門	スコア
1937	「午後」	独唱、Pf. 堀口　大学	
	「溝（泡、蛆)」	〃　佐藤　一英	室内Orch.（1管）伴奏版（ワインガルトナー賞二等入選－未演奏）あり
1938	「もう直き春になるだら(ろ)う」	〃　城　左門	二稿（伴奏）あり、現代版によるOrch.(1管)版あり 「三つの季節のうた」III「もうすぐ春になるだろう」 IIIは1940を参照
	歌曲集「四季の歌」	〃	
	I. 春がきた	風巻景次朗	II、IVは「三つの季節のうた」
	II. 海水浴	堀口　大学	I、II
	III. 高原	宮沢　賢治	I？　IVオーケストラ伴奏版あり
	IV. スキー(イ)	春山　行夫	
	「祝祭」	独唱、Pf. 北川　冬彦	無調による
	「髪の花」	〃　菊岡　久利	Str-qu.伴奏版あり
1939	「みのむし」	〃　勝田　ウメ	
	「果樹園」	〃　風巻景次朗	
1940	「高原」	独唱、Pf. 宮沢　賢治	「宮沢賢治・三章」I T.B.男声合唱伴奏付き版あり (三宅春恵氏蔵)
1942	「讐(かたき)ありき」Op.17	Chor.Orch.（2管） 三好　達治	支那事変五周年記念交声曲の一部（第1楽章？）
1944	「日本の歌」	アルト独唱、 Orch(1管) 深尾須磨子	Orch.(2管)版。異稿。他に2稿あり（1945、1959)。 1959年稿パートあり Pf. Fl. 助奏付き版あり(1959)
	「竪琴の音によせて」	ソプラノ、アルト、バリトン 女声合唱 Pf. 深尾須磨子	萩野綾子追悼 Orch.(2管）版あり？
1946	歌曲集「祖師谷より」Op.24	独唱、Pf. 深尾須磨子	
1949	「秋三題」	独唱、Pf.	
	栗の毬の	多田　三七	
	コスモスの花		
	土堤の尾花		
1052	「風の又三郎」	独唱、Pf. 宮沢　賢治	「宮沢賢治・三章」III T.B.男声合唱伴奏付の編曲あり（三宅春恵氏蔵)
1953	「柳ちる町」	〃　喜志　邦三	NHKラジオ歌謡
	「幼なき歌」	朗読、Pf. 野上　彰	
1953	「遥かな花」	独唱、Pf. 深尾須磨子	
1954	「貧し(き)陽者」	〃　藤浦　洸	室内Orch.版あり。NHKラジオ歌謡
? 1955	「サロメの月」	〃　深尾須磨子	一部スケッチ、一部声楽パートのみ確認
1955	「市場帰り」	〃　宮沢　賢治	「宮沢賢治・三章」II
? 1955	「原体剣舞連」	独唱？2Pf. 打楽器 宮沢　賢治	楽譜不明
1956	「峰のうた」	独唱　深尾須磨子	
1958	「小さなメロディ」	〃	「同人名簿」のタイトルで歌詞付き版あり
1963	合唱曲「歌えわれら」	Mix chor. (8声二重合唱) 丸山　重威	六大学混声合唱連盟のために

	その他の作品（備忘録記載分のみ）	編　成	備　考
1952	「親鸞」	Orch.	スコア ラジオ東京連続小説のための音楽
1954	「あなたには聞こえますか」	？	1954年11月1日NHK放送、音楽物語（伊藤海彦作） スコア、パートNHKデータ情報部
1959	小カンカータ <わが皇子(みこ)とわが妃> (「皇太子・美智子賛歌」)	Mix-chor.＋？	合唱譜のみ確認 Orch.(2管）「よろこびのファンファーレ」スコアあり

山田一雄とその歌曲

畑中 良輔

滝廉太郎に端を発し、山田耕筰、信時潔によって、その方法論を確立した日本の芸術歌曲は、第一期とも呼ばれる創成期を経て、第二期の継承期に入り、その中で、橋本国彦(1904-1949)の出現によって、その様相を変えはじめた。

ドイツ・ロマン派主義の傾向が強かった日本の作曲界に、フランスの印象派主義の新風を吹き込んだのである。それまでは、どちらかといえば、機能主義的なドイツの和声の上になり立っていた日本の歌曲が、橋本国彦の「時代を先取りする」新しい精神の目覚めによって、表現の振幅をひろげ、音楽的想像力の解放を果たしたのである。

もちろん、それ以前には、清瀬保二のような極めて個性的な、在野派の作曲家も見逃してはなるまいが、歌曲の面では、橋本国彦が、それまでに見られなかった新鮮な技法をもって、歌曲の分野を開拓しはじめたのである。それまでは、いわゆる自由律による詩への作曲は、あまり試みられなかった。彼が1928年に発表した「斑猫(はんみょう)」は、当時の歌曲界に衝撃を与えたもので、深尾須磨子のフランス風な洗練に対し、橋本国彦は、ラヴェル風のエスプリでこたえたのである。

新しい変貌を見せはじめた第二期〈継承期〉をさらに発展させた第三期が、そうして次にやって来ることになる。

この〈発展期〉には、1910年生まれの平井康三郎、11年生まれの清水脩、12年生まれの石渡日出夫、山田一雄らが数えられ、歌曲の世界に多彩な技法を持ち込んだ。

*

この中で橋本国彦の作風を承け継ぎ、更に現代風な視点の中に歌曲を書き進めたのが、山田一雄である。

この世代のひとたちが、創造へ向かおうとする姿勢をとりはじめた1935年あたりから、日本の作曲界は、《創造》に対して、ひとつの明確な意志を持ち始めたように見える。「音楽コンクール」は1932年(昭7)に始められ、作曲部門も入っていたし、殊に35年(昭10)に来日したロシアの作曲家チェレプニン(Alexander Nicolievitch Tcherepnin 1899-)が、「チェレプニン賞」を設定したり、世界的指揮者ワインガルトナー(Felix Weingartner 1863-1942)の来日(1937・昭12)による「ワインガルトナー賞」によって、創作活動が活発な様相を示し始め、世間の注目を浴び始めたのである。

平井康三郎、清水脩は「音楽コンクール」にそれぞれ入賞し、また山田一雄も、「ワインガルトナー賞」に入選して、名実ともに作曲家としての第一歩を踏み出したのである。

山田一雄の歌曲は、この「ワインガルトナー賞」より以前に書きはじめられたものであるが、35年(昭10)に書かれた「コクトオ・三題」「宮沢賢治・三章」のうちの“高原”などは、彼が東京音楽学校を卒業した年の作品である。

創作とならんで彼は指揮の分野にも進んで行った。尾高尚忠と共に、「新響」から「日響」(現在のN響)になったこのオーケストラを、ローゼンストックの離日以来引き受けて、多くの名演を残した。バッハの宗教作品、殊に「ロ短調ミサ曲」や、マーラーの交響曲の見事な演奏は、今なお語り草になっているものである。

山田一雄の音楽的活動は、今なお、指揮の分野にそのウェイトはかけられている。かつて書かれた交響詩「交響的木管」「若者のうたえる歌」のようなオーケストラ曲は、全く書かれなくなった。もし、今後、作曲での期待に応えるものとしては、声楽曲の分野であろうことは疑いない。彼がまだ手を染めていない合唱曲の分野をも含めて。

山田一雄の歌曲のすべてに流れるもの、その共通項として、《ラテン的明晰さ》が挙げられよう。彼が指揮という、再現芸術のジャンルにおいては、ドイツ的なるものが圧倒的にその量を占めているのだが、創造面にあっては、その志向する世界が正反対の方を示しているのが興味深い。

この《ラテン的明晰》は、既に「コクトオ・三題」に明らかである。そこにはドイツ的重厚さはない。感覚の上での先鋭な精神の目覚めが、みずみずしいかたちで、コクトオの詩をとらえている。橋本国彦が、ドビュッシーやラヴェルたちから学びとった音感覚と、ドイツ機能和声への反旗の精神がよみとら

れる。機能主義、言葉を変えていえば権威主義への反発は、山田一雄の意識のどこかに潜在していた筈である。橋本国彦の「時代を先取り」する精神は、山田一雄の中にも生きていたといわねばならない。

精神面はさておいても、現象面として、山田一雄の歌曲の新鮮さは、全く魅力に溢れたものであった。今までに最も演奏され、また聴衆から好まれた歌曲は「もう直き春になるだろう」であるが、このリズムの新鮮さ、詩の扱い方の独創的なやり方は、更に新しい歌曲の作曲技法を提示したのである。

この曲が発表された昭和14年から現在まで、いささかの古びもなく、常に新しい感動を聴衆に喚び起こすのは、ただ技法が新しいからという事だけではない。技法の新しさだけで曲が成り立つとすれば、技法の進展と共に、その曲は古び、葬り去られるだろう。

山田一雄の歌曲は、他の作曲家に比べて、決してその数は多くないのに拘らず、どの曲もが愛され、歌われ、聴かれるというのは、その本質に、最も純粋な《抒情の世界》が確立されているからに他ならない。

技法から見れば「もう直き春になるだろう」の冒頭一小節だけ見ても、ト長調の歌曲が、変ホ長調の和音から始まる。これはドイツ・ロマン派の使い古しの技法で、殊にリヒアルト・シュトラウスがよく使ったやり方だが、次に来る主和音のト長調の和音につづいて属九の和音で、この主調の機能をぼかしてしまうやり方が、いかにも洗練の極みである。リズムの新鮮さと、和声の弱進行をもった噛み合わせは、単にダンディズムと呼べない、一種の“古典性”を持っている。この“古典性”こそ、《ラテン的》なるものを支えている大きな柱であるといえよう。

「宮沢賢治・三章」のすがすがしい抒情も、その古典性によって不滅のいのちを与えられている。この三つの歌曲が現在のかたちになるまでに20年の月日がたっているが、その古典的なるものの回帰性によって、少しの異和感もない。その古典的覚醒は、現代における透明な情感の結晶であり、永遠を志向するかたちであると解釈すべきである。宮沢賢治のあの昇華された、クリスタルのような肌ざわりを持つ抒情の世界が、ここでは人間の歌として生きて来る。“風の又三郎”の曲頭に記された「暗く心に泣きながら」という作曲者のこころが胸を打つではないか。

*

橋本国彦が、深尾須磨子の詩と深いかかわり合いを持っていたように、山田一雄もまた、深尾須磨子の詩による大きな歌曲集を完成している。フランスの詩人、作家でもあるコレット女史に私淑し、マルセル・モイーズにフルートを学んだ深尾女史の影響を、山田一雄は受けたに違いない。

歌曲集「祖師ヶ谷より」は、ピアノによる「インターメッツォ」をふくむ12曲からなっているが、第二次大戦の終った年に書かれたものである。演奏活動も思うように許されない戦争末期、一切の音楽生活を阻まれて、心の中に閉じ込められていた山田一雄の〈音楽〉が、ここで一気に噴き上がったようなほとばしりを、この歌曲集は持っている。

山田一雄がこれほど〈うた〉に執着を持った事がないとでも云いたいような、一気呵成の〈ながれ〉が、全編を覆っていて、その輝かしい創作欲の湧出は、多様な楽想を生み出したのである。

ここでは、かつてシューマンが、「歌って、歌って、歌い死にしそうです」と、クララに書き送った、例の“歌の年”のように、それまで抑圧されていた音楽が、ここでのびのびと歌い出したのである。

深尾須磨子、ジャン・コクトオ、堀口大学、春山行夫、城左門——宮沢賢治は別格としても、これらの詩人はすべてフランスの詩人にかかわりのあるひとたちばかりである。

山田一雄の歌曲の底に流れる《ラテン的明晢》も、これらの詩人を抜きにしては考えられぬところであろう。

山田一雄の作品が、現在残されているものだけにとどまらず、更に円熟した彼の音楽を、作品として今後書かれるように願わずにはいられない。

＊本文は1973年ビクター音楽産業㈱より発売された、レコード「日本歌曲全集8・山田一雄作品集」の解説より転載させて頂きました。

山田一雄指揮

主要邦人作曲家別初演曲リスト——上原　誠(打楽器)

芥川也寸志	交響管弦楽のための前奏曲(1947)	1990.1.20 新響
	バレエ音楽「湖底の夢」(1950)	1950.11.6 東フィル
池野　成	序奏と交響的アレグロ(1952)	1952.10.25 N響
池内友次郎	熊野(ゆや)(1942)	1942.4.19 N響
	交響的二章(1951)	1951.11.4 N響
石桁真礼生	交響譚詩「海女」(1958)	1958.2　新室内楽協会
石原　忠興	管弦楽のための雅歌(1973)	1975.2.28 日フィル
伊福部　昭	交響譚詩(1943)	1943.11.20 東響
	ラウダ・コンチェルタータ(1979)	1979.9.12 新星日響
伊藤　隆太	嬉遊曲(1950)	1950.10.30 N響
稲垣　静一	スペクトラム(1975)	1975.12.12 京響
内田　勝人(まさと)	トラヴスマ67(1967)	1975.2.28 日フィル
大木　英子	交声曲「勇士の名を振るうを慕う歌一首並びに短歌」(1942)	1942.12.5 N響
大木　正夫	協奏詩曲「舞い楽」(1961)	1961.11　東響
大沢　和子	一つのテーマによる交響4楽章(1956)	1956.11.19 N響
大前　哲	シュトイエルンク(1975)	1975.12.12 京響
石井　眞木	交響詩「祇王」(1984)	1985.5.16 日フィル
小倉　朗	ピアノ協奏曲イ短調(1944)	不明　N響
	主題と変奏曲とフーガ(1946)	1946　N響
	序曲(1949)	1946.8.6 N響
	オーケストラのためのコンポジション嬰ヘ調(1975)	1975.12.22 京響
尾崎　宗吉	田園曲(1939)	1945.3.14 N響
川崎　優	フルートと管弦楽のための3楽章(1953)	1953.10.25 N響
貴島　清彦	祭礼囃子による嬉遊曲(1963)	1963.10.23 東響
清瀬　保二	日本民謡の主題による幻想曲(1939)	1939.12.7 N響
	御軍に従い奉らむ(1942)	1942.12.5 N響
	お祭り(日本祭礼舞曲)(1942)	1942.12.26 N響
楠　知子	アンファントゥム	1986.2.27 東フィル
江　文也	紺碧の空に鳴りひびく鳩笛(1944)	1944.6.7 東フィル
小山　清茂	信濃囃子(1946)	1946.6.3 東フィル
佐藤慶次郎	レントとアレグロ(1954)	1954.10.25 東フィル
佐藤　真	交響的変容(1975)	1975.10.26 N響
佐藤　敏直	星と大地に寄せる舞曲(1974)	1974.12.26 新星日響
宍戸　睦郎	ピアノ協奏曲第2番(1975)	1976.2.13 日フィル
柴田　南雄	ディアフォニア(1979)	1979.12.25 京響
清水　脩	管弦楽組曲(1952)	1953.1.10 N響
助川　敏弥	オーケストラのためのパルティータ(1960)	1960.11.24 東響
高田　三郎	オペラ「蒼き狼」(1970～72)	1972.10.15,16 二期会・東フィル
田村　徹	ピアノ協奏曲(1979)	1981.2.19 日フィル
團　伊玖磨	管弦楽のための「夜」	1982.12.20 京響
塚原　哲夫(せつお)	交響曲第1番(1962)	1962.2.19 東響
辻井　英世(えいや)	ファンタスマ(1975)	1975.12.12 京響
坪能　克裕	1の像(1979)	1979.11.1 N響
陶野　重雄	交響曲ホ調(1953)	1952.10.20 東響
戸田　邦雄	交響序曲イ短調(1943)	1943.11.20 東響
永富　正之	演奏会用アレグロ(1954)	1954.10.25 N響
中村　滋延(しげのぶ)	第1交響曲「アニマ」(1978)	1979.3.19 東響
	ジェネシス	1986.2.27 東フィル
夏田　鐘甲	交響管弦楽のための3楽章(1952)	1952.10.25 N響

二宮　洋	管弦楽のためのトリアス(1978)	1978.2.19 日フィル
新実　徳英	交響曲第2番	1986.2.27 東フィル
野田　輝行	ピアノ協奏曲(1977)	1978.2.10 日フィル
八村　義夫	レントとアレグロ(1960)	1960.11.5 東フィル
平井康三郎	行進曲「南進日本」(1976)	1942.12.5 N響
	慶祝音楽(1959)	不明　東フィル
平尾貴四男	序曲「平和」(1953)	1951.9.5 N響
深井　史郎	海原(1943)	1944.4.12 N響
	葬送行進曲(1943)	1944.4.12 N響
	交声曲「平和への祈り」(1949)	1949.8.15 N響
藤本　秀夫	組曲第1番(1954)	1954.10.25 N響
別宮　貞雄	管弦楽のための2章(1946)	1946.6.3 N響
	序奏とアレグロ(1954)	1955.3.25 N響
	第2交響曲(1977)	1977.10.30 N響
保科　洋	パッサカリア(1960)	1960.11.5 東フィル
牧野由多可	交響曲(1952)	1953.3.31 N響
	ピアノ協奏曲(1953)	1953.10.20 東響
松坂　一	小組曲(1950)	1950.10.30 N響
松平　頼則（よりつね）	南部子守唄を主題とするピアノとオルケストルの為の変奏曲(1939)	1939.12.17 日本放送響
松村　禎三	序奏と協奏的アレグロ(1955)	1955.10　N響
	ピアノ協奏曲第2番(1978)	1975.2.28 日フィル
真鍋理一郎	管弦楽のための3楽章(1953)	1953.10.25 N響
間宮　芳生	オラトリア「鴉」(1959)	1959.11.29 東響
	オーケストラのためのセレナード(1974)	1974.12.16 京響
丸田　昭三	シンフォニア(1955)	1955.10　N響
三木　稔	「管弦楽のための春秋の譜」(1980)	1980　京響
箕作　秋吉	ピアノと管弦楽のための小協奏曲(1953)	1953.8.22 東フィル
	ピアノと管弦楽のための協奏曲(1953)	1953.4.23 N響
	管弦楽のための3楽章(第2交響曲)(1963)	1964.10.30 東京放送響
三村　恵幸（よしあき）	交響曲(1974)	1976.2.3 日フィル
諸井　三郎	交響幻想曲ハ調(1943)	1943.10.26 東京放送響
	交響曲第3番(1944)	1950.5.26 N響
諸井　誠	第1協奏交響曲「偶対」(1973)	1973.12.8 京響
森村　寛治	小組曲(1955)	1955.10　N響
保田　正	交響詩「新しき土」(1946)	1946.6.3 N響
柳　寛	ファーター・モルガナ交響曲(1953)	1953.10.25 N響
	交響曲第2番(交響的瞑想曲)(1955)	1955.10　N響
山田　和男	おほむたから(1944)	1945.1.1 N響
	日本の歌(1944)	1946.3.4 N響
	戦列に(1944)	1945.1.1 N響
	二つの慰安曲(1944)	1944.6.25 N響
	小交響曲「名人」(1956)	1956.9.10 新室内楽協会
	日本の歌(1959)	1959.4.8 大阪放送響
山田　貞子	暗玄の賦(1946)	1946.6.3 N響
吉野　一行	管弦楽のための変奏曲とフーガ(1960)	1960.11.5 東フィル
依田　光正	管弦楽のための祝典音楽(1960)	1960.11.5 東フィル
吉松　隆	朱鷺によせる哀歌(1980)	1981.2.19 日フィル

山田さんを思う

伊福部　昭

私と山田さんとの最初の出会いは、昭和18年にビクターの第２回管弦楽曲懸賞で一位になった「交響譚詩」が録音される時でした。当然、指揮者の山田さんも他のオーケストラのメンバーもみんな初めて顔を合わせたわけです。レコーディングは９月に行われ、その翌年５月には日本交響楽団の定期演奏会でコンサート初演されました。いずれも山田さんの指揮でした。

最初の出会いの印象といっても、私は作曲家として自分の作品のことばかりしか頭にありませんでしたが、なにより自分の抱いていた作品と山田さんが演奏するものとがあまりにも違っていたことは良く覚えています。そもそも、私の作品なんて弱々しいものですが、リハーサルの最初は山田さんがそれを非常に繊細に、まさに弱々しいままに演奏しはじめたのです。たとえば第２主題に入ってオーボエの主題にティンパニが入る箇所も、山田さんは弱く蚊の鳴くように入るんです。私は「そんなデリカシーを望んでいるのではなく、もっと強く表現したいんです」と言いました。でも山田さんは「ここはこの方がいいんじゃない」と、いともあっさり私の考えを否定するんです。そんなこともあって、最初のリハーサルが終った晩、家内と二人でホテルに戻ってからも、まんじりともしないで考えていました。どうしたものかと。さすがに家内が「明日、思い切って何でも言ってみたら」と言ってくれました。翌日はお互いに相手の意見を納得するようになりましたが、私はその頃の山田さんが作曲していたことなど全然知りませんでしたし、山田さんもそのことは一言も言いませんでした。純粋に指揮者と作曲家としての出会いでしたからフランクに物が言い合えたんだと思います。また、作曲家として食っていくために指揮者の機嫌をとっておかなければ、という気も私にはありませんでしたから。

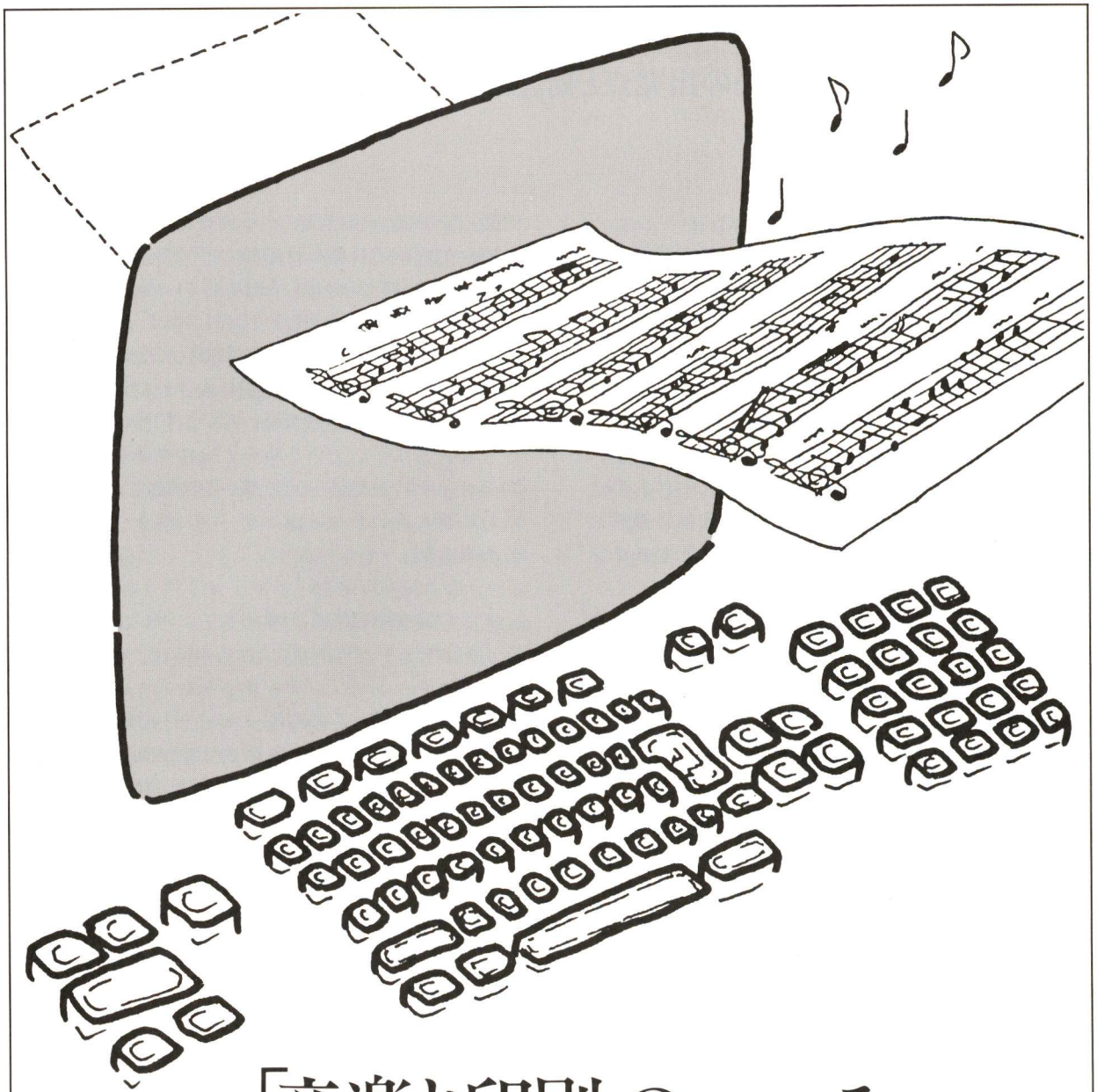
なにしろその頃の日本は戦争の真最中でした。はたしてあと何年生きられるか、という思いは口には出さないけれどみんなにあったはずです。丁度、死刑宣告された犯人のような心境と申しましょうか。山田さんも同じだったでしょう。

山田さんにはその後も私の作品をいろいろ演奏してもらい、最近になってからも初演をしていただいたものがずいぶんありました。79年の新星日響の創立10周年記念委嘱作「オーケストラとマリンバのためのラウダ・コンチェルタータ」や、87年の定期公演100回記念作品の舞踏曲「サロメ」(1948年作の改訂版)、また、日フィル定期で「土俗的三連画」なども演奏してもらい、新星日響の２曲はレコードにもなっています。また、ヴァイオリンの前橋汀子さんがロシアに留学する時、たしか14歳ぐらいの時でしたか、日本人の作品が欲しいということで私の「ヴァイオリン・コンチェルト第１番」をＮＨＫで録音してもっていきました。それも山田さんでしたね。

山田さんが舞踏曲「サロメ」のリハーサル中にある箇所にきて、みんなに聞こえるように「うん、うまいね。…演奏じゃないよ。曲だよ」といってくれた。私にしてみれば、作品で自分が苦しんだ箇所もちゃんと知ってくれてるようで、嬉しく思ったものです。やはり山田さん自身が作曲する苦しみや喜びを知っていたからではないでしょうか。時にはオーケストラに向かって「これが伊福部音楽というんだ」などと言ったり、つまらない和音でも、作曲家がそれを選ぶのにどれだけ苦しんだかを知っているのです。作品に対する理解と補いには、他の指揮者にはない独自なものがありました。戦争の経験なども含め、同時代者として共鳴する部分が多かったことが私の作品の理解や共感につながっていると思います。(談)

(1992年６月20日　聞き手/文：桜井健二)

＊本文は雑誌「音楽現代」８月号の“回想の山田一雄”より抜粋し転載させていただきました。



「音楽と印刷」のハーモニー

いま、あらゆるジャンルの音楽が、私たちの生活の潤いを演出しています。
その音楽の世界にも、DNPの最先端技術が活躍しています。たとえば、楽譜づくり。いままでは、多くの時間と労力がかかりましたが、今では、DNPのCTS(コンピュータ・タイプセッティング・システム)が総譜からパート譜まで瞬時にディスプレイ上に描き出すようになりました。
そしてDNPはマルチメディア時代を迎え、画像や映像と音楽のイイ関係にチャレンジしています。

DNP
大日本印刷

音楽の使徒、山田一雄/その出発点と到達点

篠原 辰夫

山田先生の音楽は変わりつつあった。

この数年来の音楽会を通じて、かつての派手で激しい感情の表出を身上としていた音楽作りが、繊細で優美、けれん味のない、無為の自然さに向かっているとの思いを強くしていた。

それを感じたのは、カザルスホールで新日フィルと演奏したハイドンの交響曲シリーズを聴いてからだった。そこで音楽は暖かくありのままに息づき、優美に流れていた。いま流行(はやり)の古楽的にリズムの立ったためりはりの利いたものでも、ひと昔前の整然とスクエアな新古典的な演奏とも、大時代的なロマンの色濃いものでもない。

今の日本の音楽界で、その種の音楽は慎ましさゆえに強くアピールしない。対極にある朝比奈先生の音楽と比べて、大向こうをうならせる剛毅さにかけるうらみがあった。それにしても、この味わい深い音楽を記録として残せないだろうか、と考えていたのが1989年。

先生とのおつきあいは、新日フィルの事務局に入った'75年から。もっぱら会場と練習所でのものだったが、たちまちにしてその音楽と人柄に魅せられた。

演奏旅行で日に2度、3度と演った先生十八番(おはこ)のチャイコフスキーの5番が、毎回テンポと表情を変えて新鮮に現れる驚き。そのアンコールに、舞台袖から一気に指揮台まで駆け上がり、万雷の拍手を断ち切って振り向きざまに炸裂する「トリッチ・トラッチ・ポルカ」の粋な立居振舞。R．シュトラウスの「アルプス交響曲」の絢爛たる色彩の絵巻と、下山途中の嵐の場面で、指揮者の誤標識で道に迷って遭難しかかったオケの面々。ショスタコーヴィチの9番とヤナーチェクの「シンフォニエッタ」の定期公演の時、先生の弟子で友人のKが、本番中に先生の棒を何度となく見失ったのに、何故かオケはちゃんと迷わず付いていたという不思議さの述懐。後にも先にも唯一回、山田／新日フィルのマーラー演奏、「9番」での清らかな深み。ベートーヴェン「第9」の4楽章、vor Gott！の大フェルマータの後に始まるマーチで、伴奏のみが延々と続き、旋律がいつまでも出てこないのを反響板の裏で聴いていたときの戦慄。クリスマスの日、ハイドンの交響曲シリーズのアンコールに会場をほの暗くして奏された「セレナーデ」の、時が止まらんばかりのロマンティックさ…。　想い出は尽きない。

年に何度かは新日フィルの指揮台に上がられ、その練習の度ごとに名言と逸話を残されたが、これほど楽員に愛された指揮者はいない。拍節とテンポがどうも判りにくいという昨今では指揮者として致命的なマイナスを数倍上回る豊かな音楽性と表現力、さらに百人近いオケの面々を一点に惹きつける“花”のある人柄。

先生の音楽を残そうと考えると、思い出すのが以前インタビューで伺った、「これからは、モーツァルト、ベートーヴェン、マーラーをやっていきたい」との言葉だった。そのうち、マーラーは新譜で完奏したライヴ録音がある。その内容はプロ勝り、テクニックでは一短あっても曲への愛情と練習に時間をかけた分、深い味わいが出てプロでも太刀打ちが難しい。ベートーヴェンは、新日フィルとしては朝比奈先生とのライヴ全集をCD化したばかりなので、せめてもう5年してから山田先生で録りたいと思い、残るはモーツァルト。間近に没後200年が迫り、その前年は先生の音楽生活50周年にあたっていた。こうして条件が整い、フォンテックとのモーツァルト・プロジェクトは動きだした。

録音を2か月後に控えた頃、先生からスタッフと食事をしたいとのお誘いがあった。曲目を詰める良い機会だと横浜の霧笛楼にお伺いしたが、こちらが水を向けてもなかなか核心に触れられない。迷われているように感じられた。今にして思えば、このオーケストラで、この録音スタッフで果たして自分のモーツァルトが録れるのか。はたまた、自分にこの仕事が出来るのかと自問しておられる様子だった。

絶えず自問、反省を課すこうした先生の真摯な姿勢は、50年にわたる楽壇生活が必ずしも順風の時ばかりではなかったことと係わっているように思えるのだ。戦後のオーケストラの発展の中、技術偏重の傾向は必至だったが、指揮者とてもその波を受けずにいることは難しかったろう。先生が本番中にふと

見せる、迷い、戸惑いに、筆者は人間味を感じるのだが、これは当然演奏していない側の好意的解釈である。そのオーケストラに伝統の蓄積がないと、乱れは大きく、時に破綻を見せる。しかし、それにもめげず近年先生を厚遇したのは、新星日響、神奈川フィル、新日フィル等、若いあるいは柔軟性を持ったオーケストラだったのには伝統の逆説を感じる。

さて、この時決まった曲は「ジュピター」をメインとして、「セレナータ・ノットゥルナ」と「偽の女庭師」序曲だった。「ジュピター」はその何か月か前に日野で新日フィルと演り、暖かで芳醇な響きに感じ入ったばかりなのでとても期待が持たれた。「女庭師」も度々アンコールに取り上げた先生のお気に入りだ。

録音は初日に「ジュピター」を録り、２日目はその補正と他の２曲という予定で進む。初日のセッションで先生はオケに優美で繊細な音を求められたが、オケは相当にめりはりの利いた音作りで応じるので思うにまかせず、ひと通り交響曲を録り終えたものの、いささかご不満ありと見うけられた。

そして２日目、「ジュピター」１楽章のリテイクから始めたが、この日は実に流麗な響きがモニター・スピーカーから流れ出てくる。スケールの大きさも加わって見事な出来栄えだった。続いての４楽章も同様。前日と打って変わってのスムースな流れに、内心ようやくこの録音のめどが立ち、ほっとしたことだった。それでも先生は、プレイバックの時や録り終えた後でも、厳しい表情をしておられたのが印象に残る。

亡くなられる半月前には、次の録音で25番のシンフォニーと「13管のセレナーデ」を是非と希望されていた。次回の録音では先生の意図をより表現出来るはずと考え、今後さらに数多くのモーツァルト録音をと願っていただけに、あと５年や10年は長生きして、ライフワークとして新日フィルとのモーツァルトを遺していただきたかったと思う。

初めに、山田先生の音楽は変わりつつあったと書いたが、永い間先生はナイーヴな自我に様々な衣裳をまとわせてこられた。近年それを次第にシンプルなものに変えていき、しばしば心中を垣間見せるようになられたと思えたのだが…

先生の若かりし頃に書かれた管弦楽曲が何曲かあって、機会があればそれを音にしたいと考えていたが、90年の暮にベートーヴェンの「第９」を先生で４公演行う際の前プロとして、何か自作をおやりいただけないかと頼んでみた。「絶対に駄目。どうしても演れっていうなら、僕は降りるよ」と言われては、無理にとも言えず諦めたことだった。青春の日記を自ら聴衆の前で読み上げるような、と考えればまことに酷なお願いと思う。

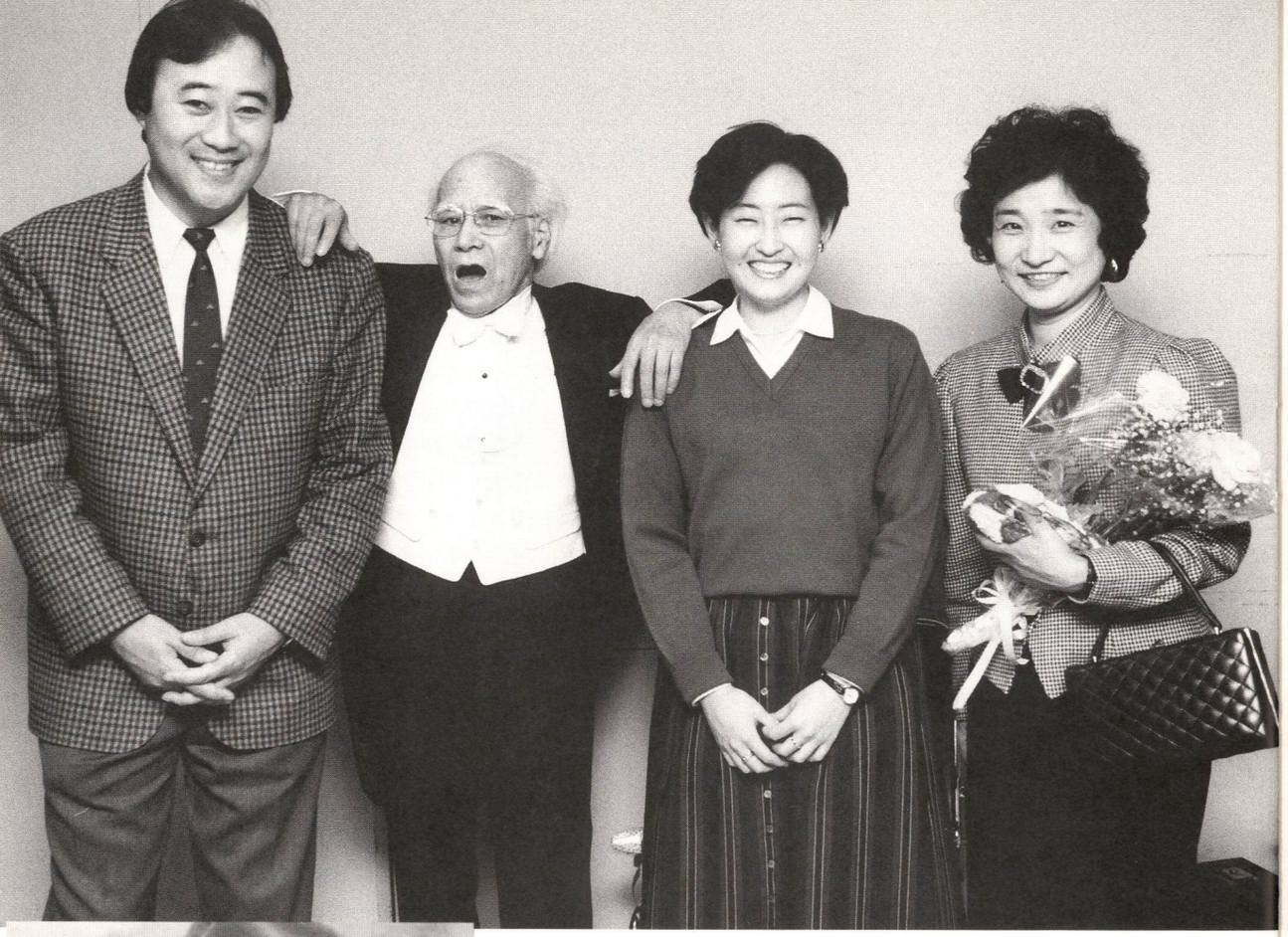
山田先生の音楽生活の出発点と到達点がイコールで結べるか否か、それを確かめるために、交響的「木曾」を今心して聴いてみたいと思っている。

（新日本フィル事務局）

新響は団員を募集しています。

新交響楽団は会社員、教員、学生、主婦などなど、さまざまな職業・年齢にわたる団員で自主運営されているアマチュアオーケストラです。音楽監督の故・芥川也寸志氏が長年にわたって主張し続けてきた「音楽はみんなのもの」を実践し、常に新しい視点を持って活動していくために、あなたの力が必要です。何はともあれ、ぜひ一度練習をご覧になって下さい。いつでも歓迎です。

連絡先：市川☎0425(62)4595　団費：入団費3,000円、団費月額4,000円。練習は毎週土曜午後６～９時、東京文化会館他にて。

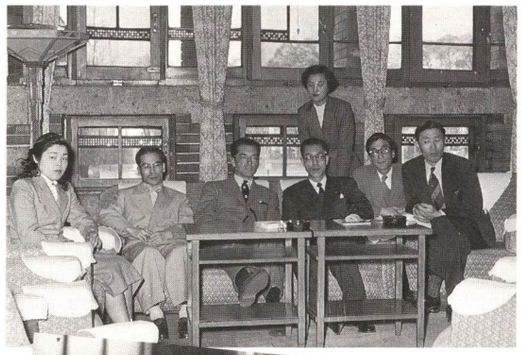


▲楽壇生活50周年記念演奏会にて。左から工藤重典(フルート)、山田一雄、吉野直子(ハープ)、御秩子夫人。
写真：木之下晃



交響的「木曾」作曲の翌年(1940)、京都にて。

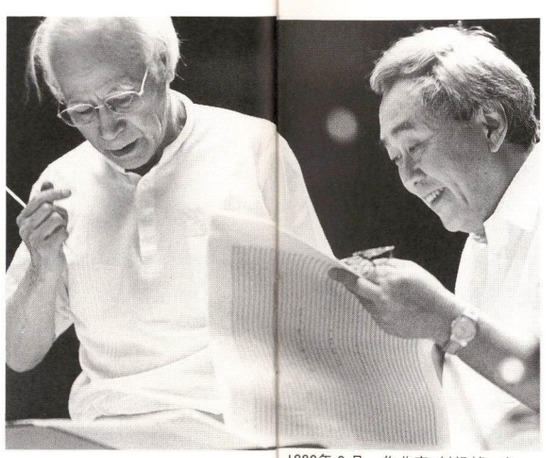
▼初来日したカラヤンと



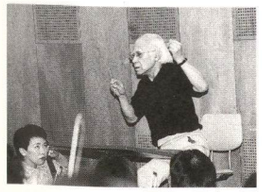


1942年、新響(現N響)の帰りに新橋で一杯。左から深井登美子、深井史郎、山田和男、鈴木聰



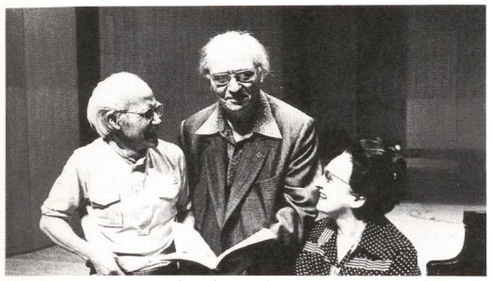


1989年9月、作曲家・村松禎三と



写真：田中　司

●このページの写真は、右下の新響演奏会およびその左のリハーサル時の写真を除き、すべて御秩子夫人のご好意により拝借したものです。



▲オリヴィエ・メシアン(中央)、イヴォンヌ・ロリオと。1978年



ストラヴィンスキーと。

▼恩師ローゼンシュトックと。





1949年、N響でマーラー交響曲第8番「千人」を初演。



ハープを弾く。1954年



1991年7月21日、生涯最後の演奏会となった新響第132回定期会。

山田一雄/新交響楽団 演奏会記録

'79.12. 1	第86回演奏会 《マーラーのタベ》	マーラー＝「花の章」／ 交響曲第5番	東京文化会館
'80.11.20	第90回演奏会 《マーラーシリーズ2》	モーツァツト＝コンチェルト・ロンドニ長調／ マーラー＝交響曲第6番	日比谷公会堂 ピアノ：渡辺達
'81. 9 .19	第93回演奏会 《マーラーシリーズ3》	マーラー＝交響曲第7番	新宿文化センター
'83. 1 .23	第98回演奏会 《マーラーシリーズ4》	モーツァルト＝交響曲第35番「ハフナー」／ マーラー＝交響曲第9番	簡易保険ホール 東京文化会館
'83.11. 1	第101回演奏会 《マーラーシリーズ5》	柴田南雄＝北園克衛の「三つの詩」／ マーラー＝交響曲第2番「復活」	独唱：S大島洋子　A木村宏子 合唱：新星日響合唱団
'84. 6 .24	第104回演奏会	ベートーヴェン＝交響曲第3番「英雄」／ ワーグナー＝楽劇ニーベルングの指環「神々の黄昏」より	新宿文化センター
'84. 9 .26	第105回演奏会 《マーラーシリーズ6》	マーラー＝交響曲第3番	昭和女子大学人見記念講堂 独唱：A井原直子 合唱：晋友会、藤沢ジュニアコーラス
'85. 7 .20	第108回演奏会 《マーラーシリーズ7》	シューベルト＝交響曲第8番「未完成」／ マーラー＝交響曲「大地の歌」	新宿文化センター 独唱：A辻侑子　T伊達英二
'86. 4 . 6	第110回演奏会 《マーラーシリーズ8》	マーラー＝交響曲第8番「一千人の交響曲」 独唱：S豊田喜代美・大倉由紀枝・岩崎由紀子 A辻侑子・春日成子　T林誠　Bar 勝部太 Bass 岡村喬生	東京文化会館 合唱：新響30周年祝祭合唱団（武蔵野合唱団、荒川少年少女合唱隊、台東区立金龍小学校音楽部、藤沢ジュニアコーラス、多摩ファミリーシンガーズ）
'86. 9 .15	清真学園演奏会	ベートーヴェン＝交響曲第５番「運命」他	清真学園講堂
'86. 9 .23	第112回演奏会	山田耕筰＝曼陀羅の華／ストラヴィンスキー＝火の鳥／ベートーヴェン＝交響曲第5番「運命」	新宿文化センター
'87. 6 .21	第116回演奏会 《マーラーシリーズ9》	ムソルグスキー/ラヴェル編＝組曲「展覧会の絵」／マーラー＝交響曲第10番・アダージョ／ラヴェル＝「ダフニスとクロエ」第2組曲	サントリーホール
'88. 1 .17	第118回演奏会 《マーラーシリーズ10》	ムソルグスキー＝「禿山の一夜」／ラヴェル＝「スペイン狂詩曲」／マーラー＝交響曲第4番	新宿文化センター 独唱：S大沼美恵子
'88. 7 .31	第120回演奏会 《マーラーシリーズ11》	マーラー＝交響曲第9番第4楽章アダージョ／さすらう若人の歌／交響曲第1番	サントリーホール 独唱：A井原直子
'89. 1 .22	第122回演奏会	デュカス＝魔法使いの弟子／レスピーギ＝リュートのための古代舞曲とアリア／ベルリオーズ＝幻想交響曲	サントリーホール
'90. 1 .20	第126回演奏会 追悼・芥川也寸志	芥川也寸志＝交響管絃楽のための前奏曲／森のすきなおとなとこどものための音楽童話「ポイパの川とポイパの木」／交響曲第1番	新宿文化センター 文：岸田衿子 語り：岸田今日子
'90. 1 .28	芥川也寸志追悼演奏会	芥川也寸志＝交響管絃楽のための前奏曲／絃楽のための三楽章(トリプティーク)/交響曲第１番	旧東京音楽学校奏楽堂 司会：黛敏郎
'90. 7 .22	第128回演奏会	ドヴォルザーク＝交響曲第9番「新世界より」／ドビュッシー：ビュセール編＝小組曲／レスピーギ＝交響詩「ローマの松」	東京文化会館
'91. 7 .21	第132回演奏会	フランク＝交響曲ニ短調／ラヴェル＝道化師の朝の歌／ビゼー＝「アルルの女」第1・第2組曲	東京文化会館

団員の声

師・山田一雄

土田恭四郎(テューバ・理事長)

新響にとって名誉音楽監督の芥川也寸志を親とすれば、名誉指揮者山田一雄は師であった、と言うことができるでしょう。

本番はるか前の、曲の初合わせの練習から、尋常ならぬ「気」を全身から発散させ、音楽好きな「普通の人間の集まり」である私たちを崇高な芸術という土俵に引き上げ、そしと真剣に音楽の中に導いていく。それも強権をもって演奏方法を指示するのではなく、笛を吹いて踊らせるというのが山田先生のやり方でした。先生には、私たちをその気にさせるのに十分すぎる大きな魅力がありました。

およそ10年という年月の間に私たちが先生からいただいたこの上なく貴重なものは、これからも私たちの精神的な支えとして、新響が新響であるために大切にしていかなければならないと信じています。

本日はご来場ありがとうございました。

山田先生の思い出

桑形　和宏(ティンパニ)

訃報を知ったのは８月15日であった。ちょっと旅行に出ていたのだが、帰るなり母からその話を聞いて呆然とする以外何もできなかったのを覚えている。

それだけ、山田先生との思い出が多かったということであろう。……練習中、励まされたり怒られたりしたこと、合宿中、「オーケストラにおいて、打楽器は音楽作品の本質をなすものではない」と言われたことなど、数えあげればキリがない。それらはすべて、集団の中でのできごとであった。しかし、一度だけ二人きりの時間？ を過ごしたことがあるのだ。

それは、７月14日のことであった。本番１週間前で、日曜にもかかわらず練習があった。場所は京浜東北線東十条駅近くにある「十条労音会館」だった。

私が日暮里駅で京浜東北線に乗り換えると、同じ車両の遠くの方に、山田先生が座っておられた。熱心にスコアを読んでいらしたので、東十条で降りてからご挨拶をしようと思い、私は漫画を読み始めた。

乗ってから１分もしないうちに、だれか肩を叩く人がいるので振り向いたところ、なんと山田先生であった。先生は「まあ座ろうよ」といって、私の背中を押した。そして、シルバーシートに並んで腰掛けた。

一団員にすぎない私の顔を覚えてくださっただけではなく、ましてや、席を立って話しかけてくださったので、大感激してしまった。そして、とても緊張してしまったことも覚えている。

車中、先生の著書である「指揮の技法」についての話をした。一夏家にこもって一気に書き上げたこと、出てくる譜例は、すべて先生がフルスコアからピアノ譜に書き直し、それが最も大変であったことなど、おもしろくてたまらなかった。そして、次々と愚問を浴びせかけてしまった。が、有名な「飛び上がってはいけない」くだりについては、どうしても聞けなかった。

東十条駅に着いて、歩き始めるとすぐに、先生が頭をおさえて、「気分が悪いから、先に行ってて」とおっしゃった。私はびっくりしたが、すぐに「大丈夫だ」とおっしゃったので、カバンを持って、一緒にゆっくりと歩いていくことにした。

練習場に着くまでの間に先生がおっしゃったことを、どんどん書いてみると、

「２年前から、夏になると、どうも頭の前の方が痛くなってしょうがないんだ」

「最近は心臓が痛くなることもある」

「私はぽっくりと逝ってしまうと思ってたが、ありゃうそだね。今年は頭、そして来年は内臓をやられ、その次の年は足がきかなくなり、ついには手も動かなくなって、ジワジワと死んでいくみたいだね。」

「最近、ひとが死ぬっていうことをよく考えるんだけど、ぽっくり死ぬ人なんていないんじゃないの。みんなどこかしらから弱っていくんじゃないのかな。」

と、このような内容の話を、約10分間、ずっとしておられた。文字にすると、妙に暗い感じがするが、話し方は、練習の時の先生そのままであった。返答に困ったとはまさにこのことで、私は「ハイ」とか「ハア」と答える以外になかった。

最後に、私が、「100歳になるまで新響をお願いしますよ、先生」と言ったとき、先生は、かすかな笑みを浮かべられた。

それからちょうど１カ月、本当に「ぽっくりと」逝ってしまわれた。しばらく立ち直れなかったのが、正直なところだ。

新響では、１月にシューベルトの９番、７月にはマーラーの５番を演奏するが、「山田先生だったら、こんなふうに振られるのかな」と、しょっちゅう考えてしまう。

山田先生とお話することはもうできないが、私は、最後の演奏会でティンパニを叩かせてもらったこと、１対１でいろいろとお話できたことを、誇りに思っている。

ほら、わかるでしょう

末村　洋子(クラリネット)

マーラーの「復活」の三楽章と「アルルの女」第二組曲のファランドール。一見何の脈絡もないこの二つの曲を演奏したときのことから、いま、並んで思いおこされる。

この２曲に共通しているのは、享楽の陰にかくされた「死」だ。片や舞踏会で踊り続ける人々にそっと寄り添う観念的な「死」であり、片や村の祭りで乱舞する人々の傍らにころがった失恋投身自殺の死体である。

山田先生は「復活」の三楽章の Es クラリネットのソロのところで何度も「もっとグロテスクに！」という注文を出された。またファランドールでは「ここは主人公が投身自殺する場面なのだから、もっとやりきれない感じを出して！」と耐えかねたように言われたのだった。

両方とも、とてもむずかしい要求だった。なぜなら、音楽の響きの中に気配を感じとることはできてもふだん意識されることのないことだったし、また一方、物語の筋書きを読んではじめてなるほどと思うことはあっても耳で聴いているだけでは全

く感じとることができないことだったからである。

私たちは自分の意識や鳴っている音楽の向こう側にあるものをやっとの思いで覗きこまなくてはならなかった。しかし先生はあたかも妖精のようにかるがると、向こう側とこちら側を行き来されていた。

芥川さんの追悼演奏会で氏の交響曲第一番を演奏したときのことだ。練習のあとで山田先生のところへききにいった。「あたまのクラリネットのソロの部分のイメージがどうしてもつかめません。先生はどう思われますか？」先生は少し困ったようにしていわれた。「ほら、わかるでしょう、何ていうのかなあ、茫漠とした……」私にはちっともよくわからなかった。つまり自分でよく考えてごらんなさいとおっしゃりたかったのだ。

先生はオーケストラのメンバーの自発性を大いに尊重された。ソロの部分の演奏がご自身の解釈と違うときにはいつもこういわれた。「あなたのやりたいことはよくわかります。でもぼくはこういうふうにやりたい……。」そして悪戦苦闘の末にやっと納得できる演奏が出来たときには、それが小さくて目立たない箇所であろうとも大きな賛辞を与えて下さった。

山田先生が何度も新響を振って下さったのは決して義理や、アマチュアに対する教育的配慮や、音楽的啓蒙思想によるものではあるまい。きっと私たちと音楽を作り出すことを楽しむためだ——先生はそう感じさせて下さったし、事実そうだったと思いたい。日常生活が音楽を支え、音楽が日常生活を支えている、この蓄積と消費の収支バランス。バランスをとるときに生じるエネルギー。私たちのこのような音楽との関わりかたに、プロの世界とはちがったものを見出され、いとおしく感じられたのではないだろうか。

幻となったショーソンの交響曲

門倉 昭一(運営委員長・コントラバス)

2～3年前のある練習日のこと、私がだいぶ早めに練習場に着くと、丁度そこへ山田先生がいらした。先生は私の顔を見つけるや否や、ニコニコしながら一冊のスコアを示された。ショーソンの交響曲である。「僕ね、いつかやりたいと思ってね。今ちょっと勉強してるんだ」とおっしゃる。新響の演奏会の曲決めに際し、先生とご相談させていただく立場に私があったが故の事だったと思う。

先生は、曲に対するご自分の好みをあまりはっきりおっしゃらなかったが、私が先生とお付き合いさせていただいた範囲で推察すれば、モーツァルト以外では、近代フランス物に相当ご執心のように思われた。例えば、ショーソン、オネゲル、フランク、サン＝サーンス、ダンディの交響曲や、ミヨー、ピエルネの小品などである。

これらの曲の少しは、最近の新響の演奏会でとり上げることができた。また、山田先生の指揮でやる予定だった今日の演奏会の候補曲として、ショーソンかサン＝サーンスの交響曲があがっていた。そして、先生から「新響さんにはサン＝サーンスの方がいいでしょう」との電話を頂戴し、その後ひと月ほどで先生の訃報に接することになってしまった。サン＝サーンスは残念であったが、私はやはりあのショーソンの交響曲ができなかったことが、どうしても心残りでならない。

山田先生からの手紙

岡本　明(ヴィオラ)

『先日はお手紙有難うございました。新響さんで私の追悼文集を作って下さるとのこと、大変うれしくもあり、また少し恥ずかしくもありますが、皆さんが何を書いて下さるか楽しみにしています。

その追悼文集にメッセージを、という貴君のご依頼ですが、自分の追悼文集に自分が改めて何かを書くのはさすがの私もちょっと変だなと思うのでこれはかんべんしてよ（最近はこういうのが流行っているのか知らん）。代わりにちょっと新響の皆さんに申し上げたいことを書きますので（ほとんどいつか貴君とハンバーガー屋で話したことと同じですが）貴君が適当にまとめてください。

さてあれ以来、日本の楽壇の皆さんが私への追悼文やら思い出話などをいろいろなところに書いて下すっています。ずいぶんと持ち上げてくれたりひやかしたりしておるが、みんな親しみを持って書いて頂いているのは本当にうれしい。だけど書かれているのを見るとほとんどの人が僕の棒は下手だ、と言っている。いや、皆さん実に文章がうまく、決してストレートに下手だとか見にくいとは書いてないのだけれど言いたいことはおんなじで、書きながらニヤニヤしているにちがいありません。書かれているとおり、そのためにいろいろアクシデントがあって迷惑をおかけしたこともあった様ですが、どうもぼくは終ったコンサートのことはすぐ忘れてしまうたちなので一つ一つはあまりよく覚えていないんだなあ。それに、ぼくはあの指揮のスタイルは自分では最高のものだと思っている。ぼくには棒の先だけのテクニックで音楽が作れるとは信じられないし、ぼくにとって音楽は愛そのものであるから、それは身体全部で表現したいのです。それが見にくい棒、というふうになってしまっているのは残念だけど“ヤマカズの棒が見やすい”なんてことになったら世の中から面白いものが一つ消えてしまうことになりはせんか。これは冗談としても、新響の皆さんとも長い間おつき合いさせて頂いたけれど、ほとんどの人が棒がわからなく困っただろうと思う。だけどぼくは棒を見てほしくなかったのです。ぼくといっしょに息をなすってほしかった。ぼくと心臓の鼓動を同じにして頂きたかった。そして頭の中ではぼくと同じイメージを描きながら音を出してほしかったのです。若い諸君にこんな年寄と同じにしろ、というのはムチャだ、と言いたいでしょうが、ぼくは音楽をやっているときは年齢は全く関係ないと思っている。肉体的なおとろえはやむを得ないがそれは精神的な力でカバーして常に一定の若さを保つことができるのです。これまでに何度か皆さんがぼくといっしょに呼吸をして同じイメージをもって音を出して下すったことがあった。そしてその時本当にすばらしい演奏が出来たのです。それはほとんど一瞬で、ほんの1小節、1フレーズだけだった時もあり、また時には楽章全体、曲全体がそうだったこともありました。一

つ一ついつのことだったかは覚えてはいないのですが、この様な形の、本当の意味での良い演奏が出来るということは、皆さんはやればお出来になる、ということなのです。アマチュアということをときに逃げ言葉に使っているフシがあるのは残念なことです。僕は新響を振るときにアマチュアだということを意識したことはないのです。いや、意識はしていても棒を振り下ろしたとたん忘れてしまう、ということかな。

ところでぼくにとっての音楽は愛そのものだ、と書きましたが、新響の皆さんはぼくにいつも愛情をもって接してくれました。新響という名前もぼくにとっては縁の深いものになりました。僕が指揮者としてデビューしたのは当時の新響、そして50年後奇しくも最後の棒となったのが新響です。新響へのぼくの愛は変わりません。残念ながらもう実際に皆さんと分かりにくい棒でいっしょに音楽をつくることはできないけれど、ぼくが皆さんに訴えたかったこと、作りたかった音楽を少しでも覚えていてくれて音楽をなすって頂ければ本当にうれしく思います。ではごきげんよう。』

さて、これは私が天国の山田先生に送った手紙に対する先生からの返信である。文中、先生は私に適当にまとめて私が書くように、と指示して居られるが、なつかしい先生からのお手紙であるし、私にはうまくまとめる自信もないので全文をここに載せさせて頂く。私信なので文体も会話調になったり、である調になったり自由な形となっているがあえて原文のまま御紹介することとした。

新響に君がいれば安心だ！

石川 嘉一(チェロ)

1978年の12月、新響の総会席上で我等の音楽監督・芥川也寸志先生も社会的に多忙になってきたため、他に指揮の専門家を招きたいという話になった。そのとき若い指揮者を推薦する人もいたが、僕はベテランの大家山田一雄先生に是非とも新響の指揮をしてほしいと考えた。その理由は、私が以前所属したOB交響楽団での忘れ難い音楽的体験と、新響に新風を吹き込むためにこれが絶対よい組合せだと考えていたからである。

勿論、僕は「新世界」や「未完成」をお願いする気持ちであったが、当時の運営委員長の故・橋谷幸男君が、山田先生にはぜひマーラーの交響曲全曲を指揮してほしいと主張した。それはまさにタイムリーで時代の先取りであった。山田先生はちょっと首をかしげながら「難しくてできないよ。でもやろう、やろう」と答えて下さった。その後、日本のマーラーブームが続いてきた。

また先生は複雑難解の現代の作品、特に日本の新しい作品に強い興味と共感を示された。團伊玖磨先生は「山田先生が新しい邦人作品を振ると本当によくて情熱があり、最高の指揮者ではないかな。僕は大好きな人だ」と説明された。

ここで先生について特に印象的なことをいくつか思いだしてみたい。

先生は外に出ると常に少しポーズをとりながら上着を肩に引っ掛け、何となく楽しく、半分テレながらニコニコと挨拶されるのはいかにも「ヤマカズ」先生らしい。その一方、練習で疲れると常に自分だけの世界に閉じこもり瞑想にふけりながら……。

また新響名物の「合宿パーティー」には必ず出席され天真爛漫に振舞い、ジョン君の「歌舞伎芝居」や「ものまね」等団員と共に楽しんで下さる。よく僕は世界の指揮者のまねをする。あるとき先生が「君！ヤマカズのまねを頼む」と言われ、僕は困った。前にベルリンフィルの人がカラヤンのまねをしたら、急に大指揮者の機嫌が悪くなり、しばらく二人は口を聞かなくなったという話も聞いているし…。でも僕は思い切って「エロイカ」のスタート8小節をやってみた。その瞬間、先生はカッと大きな目を開いて、「まさにその通りだ！新響に君がいれば安心だ！」「僕の手までが、つられて動いちゃうよ。」と気持よく話されて僕はホッとした。

去年7月初め、新響の練習の帰り、東十条駅から先生と二人で帰った。先生は翌日の新響の練習のため東京に泊まられるので上野まで同行、一緒にスナックにお伴した。長時間の練習のあとでも楽しそうに「君もこの店にくるの！」と言いながら、昔の音楽界の話になった。中山悌一さん、三宅春枝さんと先生が中心になり「二期会」が発足したことや、マーラーの弟子でトーマス・マンの甥であったハンス・プリングスハイム教授に作曲を学んだ話、レオニート・クロイツアー先生が多くの優秀な日本のピアニストを育てたこと、チェロではL．クレンゲルの高弟子、高勇吉先生やE．フォイアーマン教授に学んだ教育者、斉藤秀雄先生。当時、日本の代表的ピアニスト安川加寿子さんや井口基成氏との協奏曲を指揮された興味深い内輪話など大変に面白くて時間が経つのも忘れてしまった。もう電車がなくなるから帰ろうとお店を出たら「本当に今晩は楽しかった。改札口まで送っていくよ！」いかにも先生らしいお人柄……。こちらは大変に恐縮してしまった。普通、プロのオケではハイヤーで送るのが礼儀なのに、新響では手弁当で申し訳なかった。

忘れてはならないことは、山田先生を始め多くの先輩音楽家のおかげで、今日の音楽文化が栄えていることだ。先輩の苦労や努力を忘れてはならない。

ヨーロッパでは、どんな都市でも大学、図書館、美術館、オペラハウスとオーケストラがあるのが普通である。日本の文化もこれに少しずつ近づき定着して来るだろう。でも、まだまだ政治や経済が優先してしまう。かつて新響が近衛秀麿先生を迎えたとき「今に日本各地にオーケストラが出来て、音楽が盛んになる日がくる」と話されたことを想い出す。

山田先生の指揮が演奏者にとって、しばしばわかりにくいのは周知のとおりで、何とはなしにアンサンブルが崩れたり、止まったりする。しかし、だんだん慣れて来ると、先生がいま音楽上で何を言いたいのかが、すごく感じられる。むしろ他の誰よりもハッキリ、スッキリしている。その瞬間瞬間に情熱のこもったタクトが、音楽と共に自然にムジツィーレンをする。最後に演奏された「アルルの女」や「マーラーの交響曲」を聞くと、山田先生の姿が浮かび、涙が止まらなくなってしまう。

ただただ残念なことは、あのような個性的な魅力のある山田先生のもとで、今後、私たち「新交響楽団」が演奏することを望んでも、できなくなってしまったことである。

どうぞ天国にいらしても、トスカニーニやカラヤンと共にお元気で多くのオーケストラのタクトを振り続けて下さい！

JASRAC
日本音楽著作権協会
理事長　石本美由起
〒105 東京都港区西新橋1-7-13
☎(03)3502-6551



音楽のHAPPYはL♥VEで返そう。

聴いてるだけじゃないんだと思う。ときどき一緒に歌っているし、たまに胸の奥が熱くなる。
音楽があると、淋しい部屋がちょっと明るくなって、トゲトゲした気持ちがまぁるくなったりする。
HAPPYになるんです、きっと。プレゼントをもらったらありがとうってお礼を言うみたいに、こんな幸せな気持ちは愛でお返ししたいね。
JASRACは著作権の管理を通して世界の音楽をたいせつに守っています。